

[40]

152 上13 「最後に私はやっと自分に必要な論文を捜し出して、一心にそれを読み出しました。」

Kは「実際のな方面」に動き出すはずがないと分かって、少しは落ち着きを取り戻している。本を読む余裕ができた。

上04 「すると突然幅の広い机の向こう側から小さな声で私の名を呼ぶものがあります。……ご承知のとおり図書館では他の人のじやまになるような大きな声で話をするわけに行かないのですから、Kのこの所作はだれでもやる普通のことなのですが、私はその時に限って、一種変な心持ちがしました。」

「Kは低い声で勉強かと聞きました。」

「一種変な心持ちがしました。」  
Kが他人をはばかりて、うるさくならないように気遣っている。

下08 「その時彼は例の事件について、突然向こうから口を切りました。」

Kの行動はいつも私にとって「突然」である。

現在のKを私は全く把握できない。

昔のKならよく知っているが、今のKのことは全く理解できないでいる。

下13 「彼は私に向かつて、ただ漠然と、どう思うというのです。どう思うというの、そうした恋愛のふちに陥った彼を、どんな目で私が眺めるかという質問なのです。一言で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。」

今までのKは他人に批評を求めることはなかった。

もう今までのKではない。

なりふり構わない状態である。(Kにとっての初めての経験。)

それほど恋愛は奥深いもの？

153 上09 「彼はいつもに似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。」

「弱い」

意志が弱い。

自分で自分のことを決められないで弱い。

「恥ずかしい」

今までKが恥と思うことは、道に反する生き方をしたときである。

じぶんが「弱い」と思ったことはないのではないか？

自分の弱みをさらけ出している。私が自分を打ち倒そうと思っ  
っているとは全く感じていないのである。

私への絶対的信頼。

上3	「私はすかさず迷うという意味を聞きただしました。」 「いったい何に迷っているのだい？」
上4	「彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。」
上5	「進む」 お嬢さんの方面へ進んでいく お嬢さんへの恋を貫く。 「第一信条」があるから迷うのである。
153	上15 「私はすぐ一歩先へ出ました。」 実際に一歩足を前に出した。 精神的に優位に立った。攻撃へ身を転じる。
上6	「そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。」 退けるはずがないことは私には重々承知である。 Kが自分に相談してきたということは、かなり悩んでどうしようもない状態（退けない状態）になったからである。
上7	「すると彼の言葉がそこで不意に行き詰まりました。」 第一信条との葛藤があるため、「退けない」とは言えないのである。 「退けない」はお嬢さんをあきらめられない。ということ は、自分の今までの生き方を否定することである。
154	上01 「彼はただ苦しいと言っただけでした。」 「苦しい」 未知のものに対して、為すすべがない苦しさ。 答えの見つからないことに対する苦しさ。 理想と現実のジレンマから来る苦しさ。 自分の矛盾から来る苦しさ。
上01	「実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えています。」 今までKは私に苦しそうな様子を見せたことはないはず。 養家事件でもめたときも平気な顔をして、私のほうが反対に心配したくらいである。 [41]
154	上10 「私はちょうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。」 Kとのやりとりは、「試合」・「勝負」なのである。 いかにKを打ち倒すかということが問題なのである。 Kに対する同情は一切ない。

平生とは全く違う。

上 3	<p>「罪のないKは穴だらけというよりむしろ開け放しと評するのが適当なくらい無用心でした。」</p>	<p>「彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近いものではなかったのです……ただ男女に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。」</p>	
下 01	<p>「Kが理想と現実の間に彷徨してふらふらしているのを」          ある。          Kは自分をさらけ出している。          Kの弱点（Kの迷い）を私にすべて教えているようなものである。」</p>	<p>「理想」          自分の道に精進すること。          「現実」          お嬢さんへの恋に陥っていること。          「理想」と「現実」は絶対に相容れないものである。</p>	
下 03	<p>「そうしてすぐ彼の虚につけ込んだのです。」</p>	<p>「虚」……実体が伴わない。          矛盾の状態。言葉と行動が矛盾している。          Kの弱点。隙。油断しているところ。</p>	
154	下 04	<p>「私は彼に向かって急に厳肅な改まった態度を示しました。」</p>	<p>恋愛の相談に乗ると言うよりも、Kを教え諭すという雰囲気を作り出すため。          相手に自分とKとの差を見せつけるため。自分はしっかりとしているが、Kは迷っている。</p>
下 08 下 10	<p>「精神的に向上心のないものはばかだ。」          「私は彼の使ったとおりを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。」</p>	<p>同じ言葉を同じ口調で言った。          ・その時Kが言った言葉を思い返させるため。          ・Kが最も嫌う、「矛盾」に気づかせるため。          ・自分が言ったことを自分で実行できていないことを知らせるため。</p>	
155	下 11	<p>「私は二度同じ言葉を繰り返しました。」</p>	<p>「議論がそこまで行く」と容易に後へは返りません。なお先へ出ます。そうして口で先へ出たとおりを行為で実現しにかかります。」          [24]</p>
下 13	<p>「『ばかだ。』とやがてKが答えました。『僕はばかだ。』          Kはびたりとそこへ立ち止まったまま動きません。」</p>	<p>自分は精神的に向上心がなかった。          今の状態では「ばか」である。          自分を責めている          今ようやく気がついた？          以前から頭の中にあっただことだった？</p>	
<p>自分を責めることは          今まであったか？</p>			

下14	<p>「彼は地面の上を見つめています。」</p> <p>じつと考えている。</p> <p>自分がばかなのか考えている？</p> <p>矛盾を指摘されてシヨックを受けている？</p> <p>ここで初めてシヨックを受けたのなら（初めて自分の矛盾に気がついたのなら）、何も言えないし、「ばかだ」とも言えないのではないか？</p> <p>以前から気がついていることを私に指摘されて、またもう一度考えている。</p> <p>「公平な批評」で「ばかだ」と言われたことを素直に受け取っている。</p>
下15	<p>「私は思わずぎよつとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗のごとく感ぜられたのです。」</p> <p>「居直り強盗」</p> <p>自分はばかだから、精神的に向上心がなく、恋愛の道に進むのだ。</p> <p>「ぎよつとしました。」</p> <p>Kが居直って、自分の今までの道を捨てて、恋愛の道に進むのではないか？</p> <p>Kが恋愛の道に進んでいったら、自分に勝ち目はない。</p> <p>「しかしそれにしては彼の声がいかにも力に乏しいということに気がつきました。」</p> <p>「声がいかにも力に乏しい」</p> <p>Kに強い意志はない。</p> <p>強い意志はないということとは、「居直り強盗ではない。」</p> <p>つまりまだ迷っている、心を決めていないということである。</p>
156	[42]
上08	<p>「その時の私はたといKをだまし討ちにしてもかなわないくらいに思っていたのです。」</p> <p>「しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰かが私のそばへ来て、おまえは卑怯だと一言ささやいてくれる者があったなら、私はその瞬間に、はっと我に立ち帰ったかもしれませぬ。」</p>
上10	<p>二つの記述は相反する記述である。</p> <p>一度に「善」・「悪」の二面性が存在する。</p> <p>時と場合によって、変化する私の心。</p>
下03	<p>「Kはしばらくして、私の名を呼んで私のほうを見ました。」</p> <p>Kの働きかけ。</p> <p>黙っていたKが話し出した。</p> <p>心の変化があったということである。</p>

主題。

下〇 「『もうその話はやめよう。』と彼がいました。彼の目にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。』」

「もうその話はやめよう。」

自分の中で決着が付いた。

もうその話をする必要はない。  
話を続けたくない。

「変に」

思った以上に。

普通とは違つて。

普通ならそんな表情・反応は見せないのに、予想に反して見せた。

「悲痛」

矛盾をつかれて痛い。

ほしい。これ以上この話をするとうどんどん痛みが広がるのでやめて

何かの決心が頭にあるのか？

自殺する決心がこの時に頭をよぎつた。 「変に悲痛」

下〇

「『やめてくれつて、僕が言い出したことじゃない、もともと君のほうから持ち出した話じゃないか。しかし君がやめたければ、やめてもいいが、ただ口の先でやめたつてしかたがあるまい。君の心でそれをやめるだけの覚悟がなければ。いつたい君は君の平生の主張をどうするつもりなのか。』」

「僕が言い出したことじゃない、もともと君のほうから持ち出した話じゃないか。」

Kの矛盾をついた。

自分から話しかけてきたのに、「やめてくれ」というのは変なことだ。

「口の先でやめる」

単に話を切り上げる。

「心でそれをやめるだけの覚悟」

お嬢さんのことをあきらめる覚悟。

「平生の主張」

恋は道の妨げになる。

恋はくだらないことである。

「精神的に向上心のないものはばかだ。」

157

上〇

「私は彼の様子を見てようやく安心しました。」

今まで、自分の策略がKに対してどのよう利いているか、不確かだったけれど、Kの様子を見て、もう大丈夫だという安心を持った。

Kはもうお嬢さんのほうへ進むことはない。

自分の心の状態を把握できた。(「精神的に向上心のないものはばかだ。」という言葉によつて。)

上二 「すると彼は卒然『覚悟？』と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に『覚悟 覚悟ならないこともない。』と付け加えました。」

「覚悟？」

私の問いに対して答えていない。

「覚悟とはどういうものだ？どんな覚悟を指しているのだ？」

「覚悟」という言葉が引つかかった。

「覚悟」という言葉に覚えがあった。

「私がまだ何とも答えない先に」

私の答えは関係ない。

自分自身の中で「覚悟」はできあがっているのだ。

「

ダツシユ。時間の経過。間。

次の言葉を言うのをためらっている。

言おうか言わないか迷っている。

次に来る言葉を選んでいる。

次の言葉を言ってしまったら、自分で実行しなければなら

ない。

慎重になっている。

「覚悟なら」

「覚悟というものなら、」

「覚悟」という言葉を取り上げている。特別視している。

特別な覚悟？

「ないこともない」

「ある」とはつきり断定していない。

次の「独り言」「夢の中の言葉」より、言い方が弱いとい

うことが分かる。

婉曲遠回しに、いいたくはなかつた。

言うことがはばかられる。言いたくない。

できれば「覚悟」はない方がよい。最終手段

上三 「彼の調子は独り言のようでした。」

私に対して言っているのではない。

自分の世界に入っている。

自分自身の問題である。

私が言った「覚悟」とは別物である。私が言った覚悟とは関係ない。

上四 「また夢の中の言葉のようでした。」

夢うつつの状態。

「覚悟」があると云ったため、自分はその覚悟を見せなければならぬ。死ななければならぬ？

下五 「お嬢さんが笑っても、るくなあいさつはしませんでした。」

いつもお嬢さんが話しかけていた。

「39」ではKはお嬢さんに対して何か言おうとするが、ここではそんな素振りも見せない。

「覚悟」を以前から考えていた？

ダツシユ

・説明・言い換え・省略・心の中の描写・時間の経過

死ぬ覚悟？

二重否定

強い肯定

婉曲的な是認

口にしたなら、実行しなければならぬ。

現実とは認めたくない。

お嬢さんのことはこの時点で関係なくなっているか？